親の教育観に関する異文化比較研究 I

中学生における親子のズレ

○石川清子¹・宇井美代子¹・市川忍²（非会員）・松村寿美³（非会員）・新井雅人¹・

（¹東京福祉大学大学院・²伊勢崎市立第二中学校・³東京福祉大学石川研究室）

キーワード：教育観・異文化・社会的かしこさ

A Cross-cultural Study of Parents' Educational Perspectives I

Kiyoko Ishikawa・Miyoko Ui・Shinobu Ichikawa・Hisami Matsumura・Masato Arai

(Tokyo University of Social Welfare, Graduate School of Psychology・The Second Middle School of Isesaki City・The Ishikawa Research

Project of Tokyo University of Social Welfare)

Key words: Educational Perspectives・Cross-culture・Social Wisdom

【目的】 「生き悩む多文化」とも言われる（宮島、2003）「多文化共生」現象は、根本的な異文化理解の必要性を指摘しているのではない。また、近年の世界的な経済不況のあおりを受け、外国籍の人々の生活は一段と厳しくなった。そのような生活環境が子どもたちの精神衛生に与える影響は見逃せない。杉岡ら（2007）は日本とブラジルの比較文化研究において、ブラジル人親子の心理的距離が日本人よりも近く感じていることを見出し、親の情緒的支持を高く認知している子どもは、教師や友達との関係に適応しやすいとしている。三浦（2003）は、親の養育行動と子どもの学校不適応間の関連について、親から子どもへの内的作業モデルの世代間伝達を通して解明を試み、子が親に抱く信頼感と学校適応との関係性を指摘している。久光ら（2009）は社会的な場面や状況へ適応を占める「社会的かしこさ」と家庭のしつけ、学校生活経験、地域の教育力との関連を検討し、家庭のしつけと学校生活の経験が「社会的かしこさ」へ影響を与えることを示唆した。

よって教育現場における外国籍の子ども達の行動を理解するうえで、外国籍保護者の教育観を見出し、その養育態度を子どもたちはどのように感じているかを知ることにより、親子の関係性を知ることができ、また子どもたちに対して明確な方向性を持って学校は指導していけるのでないかと考えた。そこで本研究では、教育現場と家庭の教育観のズレを最小限のおさめるために、親子の教育観のズレを検証し、外国籍の家庭における教育のあり方を把握することを目的とした。

【方法】 調査対象者：群馬県内の A・B 中学校と埼玉県 C 中学校 2 年生と群馬県内の D 小学校 5 年生とその保護者より質問紙調査に協力を得た。調査時期は 2001 年 11～12 月に実施した。

質問紙内容に関する構成は、子どもに対しては、久光達也・岩淵千明（2009）の「社会的かしこさ」、松原ら（1990）の「親の養育態度」、酒井（2005）の「親子間の信頼感」の 3 つの尺度を実施した。また、保護者には、「社会的かしこさ」、「親の養育態度」、及び「親の養育肯定感」の 3 つの尺度であった。ここでは、特に中学生に焦点をいて結果を述べる。

【結果および考察】 有効回答者数は日本国籍 374 組（全体 468 組）外国籍 18 組（全体 35 組）であった。全体の傾向として 2 要因分散分析を実施した結果、親の養育態度の「保護」に関して、外国籍の親子は日本籍の親子よりも強く感じていた（ $F(1, 461)=5.03, p<.05$ 、交互作用有り）。また、「支配」に関して、外国籍の親子は日本籍の親子よりも強く感じていた（ $F(1, 482)=10.94, p<.01, F(1, 482)=24.93, p<.01$ 、単純主効果のみ）。また、「社会的かしこさ」に関しては、外国籍の親子の方が日本籍の親子よりも自己評価が高かった（ $F(1, 457)=12.63, p<.01, F(1, 457)=46.90, p<.01$ 、単純主効果のみ）。これは、杉岡ら（2007）の調査で明らかのように、南米の親子の親密な関わり方を反映していると言える。

親の養育態度（下位因子「保護」「支配」を説明変数として、子どもの親への信頼感と子どもの社会的かしこさを基準変数とし重回帰分析を実施しパス解析を行った。日本人生徒に関しては、先行研究に従い、親の養育態度「保護」と社会的知恵の下位項目それぞれの要因に関して関連が見えた（Figure1）。しかし、外国籍生徒に関しては、親の「保護」と「親への信頼感」のみに有意な結果が見られた（Figure2）

Figure 1 親の養育態度と親への信頼感と子どもの社会的知恵の関係（日本国籍）

Figure 2 親の養育態度と親への信頼感と子どもの社会的知恵の関係（外国籍）

本結果から、外国籍の中学生と日本人の中学生の「社会的知恵」という心理的発達には、明確な違いが有ることが明らかである。また、これらの違いは親密な親子関係と青年期における自己同一性のあり方と関係があると思われる。しかし、本結果は、杉岡ら（2007）のようにブラジル人生徒のみを対象としていない点や、協力を得られた中には有効でないものもあり、必然的にサンプルサイズが小さくなってしまった。これらの点を見直した研究を実施して行きたい。

【文献】

- ・久光達也・岩淵千明 2009 「社会的かしこさ」の構造及び、家庭でのしつけ、学校生活経験、地域の教育力との関連。川崎医療福祉学会誌 Vol. 18, No. 2, 393-400.
- ・三浦潤子 2003 「教育行動と学校環境適応感の関連についての検討：内的作業モデルの伝達を通して」臨床教育心理学研究, Vol. 29, No. 1, 9-19.
- ・杉岡正則・谷淵真也 2007 「滞日日系ブラジル人の親子関係に関する調査（第1報）子どもから見た親子関係を中心に」日本発達心理学会第18回大会発表論文集、310.
- ・宮島 2003 「共に生きられる日本へ：外国人施策とその課題」有斐閣。

(Kiyoko Ishikawa・Miyoko Ui・Shinobu Ichikawa・Hisami Matsumura・Masato Arai)